

平成11年度

アイヌ語ラジオ講座 テキスト

7月▶9月

Vol.2

1999

講師のプロフィール



あき べ とう へい 秋 辺 得 平

1943年、千島ウルフ島で生まれる。母がアイヌ。2才から高校卒業まで釧路で育つ。1972年から札幌市で木彫品の製作・販売に従事しながら、さまざまな「アイヌ復権運動」を行う。

1973年10月「ヤイクーカラ(自ら行動する)アイヌ民族学会」設立。現在まで会長を務める。

1976年からは「北海道ウタリ協会」理事。

1987年、釧路市に帰り言語を含むアイヌ伝統文化の復興運動に取り組む。

1989年、アイヌの海洋船「イタオマチブ」を180年ぶりに復元製作し、同年行われたアイヌ民族最後の武力蜂起「クナシリ・メナシ戦争」の200年供養祭に進水させた。

1990年、伝統的なアイヌ民具を復元制作するために「釧路アイヌ民芸企業組合」を設立、代表理事に。釧路市教育委員会・教育相談員(アイヌ児童生徒担当)、ウタリ協会釧路支部長も兼務。父方の「成田」姓を、母方の「秋辺」姓に改姓。

1991年、「ヤイクーカラの森」の会発足、代表となる。

1992年、「北海道ウタリ協会釧路地区支部連合会」会長となる。

1997年、「財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構」評議員となる。

まつ もと しげ よし 松 本 成 美

1927年高知市生まれ。白糠中学校在職時代、貫塩喜蔵著『サコロペ』(白糠町役場刊)の執筆協力を担当したが、アイヌ語学習のきっかけとなる。現在、釧路アイヌ文化懇話会会長、釧路アイヌ語の会会長を務める。

原稿執筆にあたり、宮田久子氏(釧路アイヌ語の会会員)にはLesson 3, Lesson 5, Lesson 7, Lesson 10, Lesson 11のアイヌ語例文の作成、釧路アイヌ語の会の方々には原稿作成の集団討議にご協力いただきました。

【釧路アイヌ語教室の活動について】

釧路アイヌ語教室は、毎月第3日曜日、13時～15時まで、釧路市春採にある春採生活館で開設しています。

なお、釧路アイヌ語教室に関するお問い合わせは、次のとおりです。

☎0154 41 7083(春採生活館)

アイヌ語ラジオ講座のスケジュール表

月	回	日	テ - マ
7月	1	4日	自己紹介
	2	11日	なんのためにアイヌ語を学ぶのか
	3	18日	春採湖
	4	25日	英雄叙事詩
8月	5	1日	チャランケチャシコツ
	6	8日	ぬさまい 幣舞
	7	15日	釧路川
	8	22日	アイヌプリ
	9	29日	フンペ リムセ
9月	10	5日	吉良 平治郎
	11	12日	パシクル伝説
	12	19日	難読・難解地名
	13	26日	アイデンティティー

アイヌ語には現在のところ共通語というものはなく、それぞれの地域で、それぞれの方言が学ばれているのが実情です。そのため、このテキストでは、担当講師の方言(釧路の方言)をベースにしています。

今日のポイント
自己紹介の仕方

今日の一言：
エチ・イワンケ ヤ ?
eci = iwanke ya
皆さん 今日 は

エチ・イワンケ	ヤ ?	クアニ	アナクネ
eci = iwanke	ya ?	kuani	anakne
あなたたちは元気です	か。	私	は

ハルトリ	コタン	ウン	ペ	ク・ネ	ワ	アキベ	トクヘイ
Harutori	kotan	un	pe	ku=ne	wa	Akibe	Tokuhei
春採	コタン	にいる者		であっ	て	秋辺	得平

アリ	ク・レヘ	アン。
ari	ku = rehe	an。
という	名の	ものです。

単語

エチ (eci) 「あなたたち」	イワンケ (iwanke) 「健康である」
ヤ (ya) 「ですか」	クアニ (kuani) 「私」
アナクネ (anakne) 「は」	コタン (kotan) 「村」
ワ (wa) 「~して」	アリ (ari) 「~という」
レヘ (rehe) 「~の名前」	

解説

春採コタン

明治20年ごろ春採コタンには、千代の浦（ちよのうら）海岸から丘陵地帯にかけて、およそ100戸程のアイヌの人たちが住んでいました。土地は耕作に適していませんでしたので、成年男子は漁場で働き、なかには遠く山の仕事や樺太にまで出稼ぎに行く人もいました。女、子どもは浜辺でコンブをひろい、春採湖で山菜や魚をとって、暮らしの足しにしていました。

明治24（1891）年、聖公会は基督教の伝道の一環として春採アイヌ学校を開設しました。後に、官立春採尋常小学校になりましたが、一教室に50人程のアイヌの子女が、読み、書き、そろばん、修身の勉強をしました。アイヌ語やアイヌ文化は教えられませんでした。家庭や地域の中でアイヌプリ（アイヌの風俗・習慣）の生活をしていました。



「今日の一言」エチ・イワンケ ヤ / 皆さん今日は
eci=iwanke ya

集まりで自己紹介するとき、エチ・イワンケ ヤと挨拶します。少し間をおくと参加者は口々にク・イワンケと挨拶を返します。ついで、自分の生まれた土地、母と父の名を言ってから自己紹介に入ります。おはよう、今日は、今晚はもエチ・イワンケ ヤ でよいのです。相手が一人のときはエ・イワンケ ヤと言います。



今日のポイント

アイヌ語を学ぶということ

今日の一言：

イタク カシ カムイ
itak kasi kamuy
言葉 の 霊



アイヌイタク ラム オマレキコ ニホンコタン
aynuitak ramu omarekiko Nihonkotan
アイヌ語 心 を入れると 日本

フシコプリ フシココタンレエ コプシュ ヤシカイペ。
huskopuri huskokotanree kopushu yasikaype。
古い習慣 古い地名 を尋ねる ことが出来ること。

アイヌイタク ネワ シーノ イタク カシカムイ ネワアン
aynuitak newa sino itak kasikamuy newaan
アイヌ語 は 本当に 言葉 の霊 である

イタク ネルイネ。
itak neruyne。
言葉 なのである。

本文カタカナ表記は原文のままで、それをそのままローマ字表記した。



単語

イタク (itak) 「言葉」
オマレ (omare) 「を入れる」
コ (ko) 「~と」
プリ (puri) 「習慣」
コプシュ (kopushu) 「~を尋ねる」
シーノ (sino) 「本当に」
ラム (ramu) 「心」
キ (ki) 「~をする」
フシコ (husko) 「古い」
レエ (ree) 「~の名前」
ヤシカイ (yasikay) 「~できる」

解説

このアイヌ文は、『アイヌ・モシリ』（釧路アイヌ文化懇話会刊）389頁所収の一文からとったものです。私たちは、アイヌ語を勉強していて、現在使われていないアイヌ語を勉強して何の役に立つのかと自問自答してみたり、また人から聞かれることがあります。

この文章は、山本多助エカシ（1904～1993）が実に12年もの長きにわたってアイヌ語の研究と普及に力を尽くしてきた早稲田大学図書館在職中の山路廣明氏（1910～）に贈った手紙の一節です。ここのところは「現在使われていないアイヌ語を何にするのだと考えるのであれば、その考えは本当に思慮の足りないことなのだ」で始まり、その後につづく言葉なのです。

「今日の一言」イタク カシ カムイ / 言葉の霊
itak kasi kamuy

世界が広くとも、言葉が雑多でも、肌色が違っていても、大自然のなかで生きる人類の精神基盤は同一なのだ。言葉も、また言葉の道理、その起点原点も同一であって当然である。さらに、国が別でも社会体制が異なっても、言葉はつねに大衆とともに生存している。過去から現在に、現在から将来に受け継がれる言葉というものは、人類のもつ最高の宝物で、尊いものである。

山本多助 著『イタク カシカムイ 言葉の霊』1991年版より
北海道大学図書刊行会

MEMO

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

今日のポイント
自然との共生

今日の一言：
ハル・オ・ト
haru-o-to
自然の恵み豊かな湖

ハルオト	オッタ	アナク	パイカラ	アン	チキ	ブクサ	カ
Haruoto	orta	anak	paykar	an	ciki	pukusa	ka
春採湖	で	は	春	になる	と	ギョウジャンニク	や

サク	アン	チキ	トマ	カ	チュク	アン	チキ	トゥレブ	カ
sak	an	ciki	toma	ka	cuk	an	ciki	turep	ka
夏に	なる	と	エゾエンゴサク	や	秋	になる	と	オオウバユリ	や

ウサオカ	キナ	ヘトゥクパ。	マタ	アン	チキ	ユク	ウサ	アラキ。
usaoka	kina	hetukpa.	mata	an	ciki	yuk	usa	arki.
いろいろな	山菜が	生えました。	冬	になる	と	鹿	も	来ました。

ホロ	トゥム	タ	アナク	チェブ	ポロンノ	オカ	ルウェ	ネ。
hor	tum	ta	anak	cep	poronno	oka	ruwe	ne.
水	中	に	は	魚が	たくさん	いました。		

解説

その昔この広い北海道は、私たちの先祖の自由な天地でありました。天真爛漫な稚児の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた彼等は、真に自然の寵児、なんという幸福な人たちであったでしょう。

冬の陸には林野をおおう深雪を蹴って、天地を凍らす寒気を物ともせず山又山をふみ越えて熊を狩り、夏の海には涼風泳ぐみどりの波、白い鷗の歌を友に木の葉の様な小舟を浮べてひねもす魚を釣り、花咲く春は軟らかな陽の光を浴びて、永久に囀る小鳥と共に歌い暮して露とり蓬摘み、紅葉の秋は野分に穂揃うすすきをわけて、宵まで鮭とる篝も消え、谷間に友呼ぶ鹿の音を外に、円かな月に夢を結ぶ。嗚呼なんという楽しい生活でしょう...

知里幸恵 編訳『アイヌ神謡集』序文より

時の移りとともに、自然環境は過去の面影を全く残していない状態になっています。そのために、地名の由来を正しく理解することが非常に困難になっています。

松浦武四郎は、『東蝦夷日誌』に「...ハルは黒百合・赤沼蘭・延胡索・山慈姑、其外種々の喰草を言、此草多き故號しか、...」と書いていますが、コタンの人からの聞き書きだと思われます。

永田方正は、『北海道蝦夷語地名解』に「ハルドル 向フ地 『アルドル』ト同ジ詞ナリ 『シレド』岬ノ向フノ地ヲ云フ」と書いています。事実、道南の有珠、虻田、室蘭にアルトゥルの地名があります。

「今日の一言」ハル・オ・ト / 自然の恵み豊かな湖
haru o to
ハルは自然の恵みとしての食料を言います。この地名は、日高の春立のように、春という漢字が当てられています。

MEMO

単語

- | | |
|-------------------------|-------------------|
| ハル (haru) 「飲料」 | オ (o) 「～がいっぱいある」 |
| ト (to) 「湖」 | パイカラ (paykar) 「春」 |
| ブクサ (pukusa) 「ギョウジャンニク」 | サク (sak) 「夏」 |
| トマ (toma) 「エゾエンゴサク」 | チュク (cut) 「秋」 |
| トゥレブ (turep) 「オオウバユリ」 | キナ (kina) 「山菜」 |
| ヘトゥクパ (hetukpa) 「生える」 | マタ (mata) 「冬」 |
| ユク (yuk) 「鹿」 | ホロ (hor) 「水」 |
| チェブ (cep) 「魚」 | |

今日のポイント
サコロペを謡う

今日の一言：
サ・コロ・ペ
sa kor pe
ふし ある(謡い)もの

1. エヨレロペ eyorerope	エバネクス epanekusu あるところで	オカイアンイケ okayanike 居ったところが	
2. アンカムイユピ ankamuyyupi 私の尊敬する兄	ウンチセタ unciseta 自分の家で	トノトカラキワ tonotokarakiwa 酒をつくってから	
3. トノトシサッコ tonotosisakko 酒ができあがったとき	トノトイヌムキワ tonotoinumukiwa 酒をこして	トノトアッパ tonotoappa 酒をよく吟味して	イヤンケトノト iyanketonoto 仕上げた酒
4. エポントウラノ eponturano 少ないけれど	アナウンチセタ anaunciseta 自分たちの家で	イコイノミ ikoinomi 神様へお神酒を	エネクキワ enekukiwa そのように私はして

ここに述べているアイヌ語の詞は、貫塩喜蔵エカシの筆録をそのまま転記したものです。ローマ字の分ち書きがされていないために、完全に一語一語の意味をとらえて、主な単語として、ここに載せることができませんでした。このサコロペ「狐の妖怪」は全文595の文節から成っています。エヨレロペは枕詞で、意味はありません。

解説

英雄叙事詩ユカラ (yukar) のことを道東ではサコロペと言います。貫塩喜蔵エカシ (1907~1985) は、母キシさんが口承してきていたサコロペを幼少のころから耳にして、自然に頭に入り、それを口誦しながら自ら筆録していました。

このサコロペ「狐の妖怪」は、貫塩家に代々伝わるもので、兄をたぶらかして家の財宝を盗もうとする狐の妖怪を弟がやっつける物語です。ユカラが英雄叙事詩 (英雄詞曲) と言われるように、ここでも弟のボン・オタストウンクルが英雄として登場します。

「年に一、二回お酒をつくって神様にお神酒をあげます。兄弟はたくさんの神様をまねき、シントコ (行器) をたくさん並べて、お酒をトゥキ (杯) にくみ、神々にささげます。そのとき、一人の女が神々の間を縫ってお酌をしているのを弟は見ました。弟はしばらく旅に出ていたのに、その女を兄の嫁だと思いました。

ところが、その女をよく見ますと、マタンブシ (鉢巻) をしている額から異様な光が出ています。眼からも稲光のようなあやしげな光が輝いていました。

その女を狐の妖怪と見破ったボン・オタストウンクルは女を手荒く叩いたところ、女は家の中の金、銀の宝物六箇をもって逃げ出しました。ついに女をつかまえたボン・オタストウンクルは正体をあらわした狐の妖怪をたたき殺しました。兄も正気を取り戻し、兄弟は助け合って家を守り平和な生活を送りました。」

「今日の一言」サ・コロ・ペ / ふしある(謡い)もの
sa kor pe
サ (sa) は節 (ふし)、コロ (kor) は持つ、ペ (pe) はものという意味で、節のある謡いものという意味です。サピリカは節まわしが上手という意味で、謡い手が謡いやすいようにヘツチェと呼ばれる気合を入れます。炉をかこんだ人々は、レブニという棒で炉ばたを叩いて調子を取り、興のおもむくままに謡いつづけます。

MEMO

.....

.....

.....

.....

.....

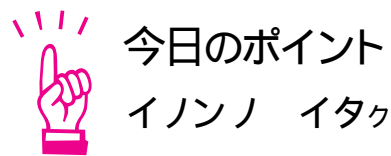
.....

.....

.....

.....

.....



今日の一言：

ヌサ オマ イ
nusa oma i
幣場 ある ところ

コン	ウセ	アペ	アレ	イキ	ヤッカイ	イノンノ	ポカイ
kon	use	ape	are	iki	yakkay	inonno	pokay
(神よ)	ただ	火	をたき	まして		お祈りする	だけでも

コ	ヤイエランペウテック	オリパク	トゥラ
ko	yayerampewtek	oripak	tura
わからず		おそれつつしみ	ながらいる

ク=ネ	ヤッカイキ	シタ。
ku=ne	yakkayki	sita。
私	で	ございます。

ネイ	テクサマ	タパン	チャシ	チャシコツ	ネ	ワ	ピリカ	チャシコツ
ney	teksama	tapan	casi	casikot	ne	wa	pirka	casikot
その	かたわらの	この	城	城跡は	何	という	美しい	城跡

ネ	ワ	クス	シタ	アイヌ	オピッタ	シサム	イキ	ヤッカイキ。
ne	wa	kusu	sita	aynu	opitta	sisam	iki	yakkayki。
でありましょう				人々はみんな		和人		であっても。



；単語

ウセ (use) 「普通の」	アペ アレ (ape are) 「火をたく」
イノンノイタク (inonno itak) 「祈詞」	ポカイ (pokay) 「(雅語)~だけでも」
ヤイエランペウテック (yayerampewtek) 「わからない」	オリパク (oripak) 「恐れつつしむ」
トゥラ (tura) 「~しながらいる」	ネイ (ney) 「その」
タパン (tapan) 「この」	オピッタ (opitta) 「みんな」
シサム (sisam) 「和人」	

解説

このイノンノイタク(祈詞)は、八重九郎エカシ(1895~1978)がカムイノミ(神に祈る)をした時の祈禱の言葉です。

カムイノミは、先祖供養のイチャルパや世の平安、食物の豊穰を祈るコタンのお祭りの席で行われ、そこでは祭主によるイノンノイタクが述べられました。チセの東側に幣場が設けられ、そこに立てかけられたイノウにお酒や食物を捧げ、コタンの人たちみんなでカムイノミをしました。

釧路川にかけられた幣舞橋を渡った丘陵には、ヌサ・オマ・イというアイヌ語が意味するように、むかし幣場がありカムイノミが行われたアイヌ時代の神聖な土地でした。現在その場所は釧路市立図書館や釧路生涯学習センターが建っています。幣舞と同じくチノミという地名が各地にあり乳呑という漢字が当てられています、チ・ノミは我ら・祈るという意味で、ここでも祭壇を設けてイオマンテ(熊送り)やイチャルパ(先祖供養)のカムイノミが行われました。

「今日の一言」ヌサ オマ イ / 幣場あるところ

nusa oma i

ヌサは祭壇のことで、イノウが並べられたところをヌササン(nusasan)「ご幣棚」と言っています。

MEMO

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

今日のポイント
リムセに親しむ

今日の一言：

フンペ ヤン
hunpe yan
鯨が来たぞ



フンペ	アンアン-タペ	クンクン
hunpe	anan tape	kunkun
鯨が	泳いで	もぐったり

プイトク	コシキリパー	フンペヤン-	タピソロ
puytoku	kosikiripa	hunpeyan	tapisoro.
出たり	とんぼ返りしたりして	鯨が	天にあがってゆく

くり返し

このフンペリムセは、この地方のアイヌの人たちに伝えられているフンペ（鯨）についての歌と踊りです。鯨が丘に向かって頭を出したり沈んだりして丘にむかって泳いできます。丘を見ると人が大勢いるので驚いてまた沖に向かいます。やがて、鯨が丘にあがったので、メノコ達が歌いながら輪になり踊って天に送ってやるという舞踊です。

春採アイヌ古式舞踊釧路リムセ保存会

解説

釧路地方でリムセの保存継承に当たっている団体は、釧路市の「春採アイヌ古式舞踊釧路リムセ保存会」と阿寒町の「阿寒アイヌ民族文化保存会」と白糠町の「白糠アイヌ文化保存会」の三つがあり、国指定重要無形文化財に指定されています。

春採アイヌ古式舞踊釧路リムセ保存会の設立は、1967（昭和42）年のことで、以来約30年間にわたって釧路地方におけるアイヌ古式舞踊の保存継承にとりくみ、現在八重清次郎会長のもとに28名の会員で練習を積み重ねてきています。

山本多助エカシが「遠矢の寄り鯨」という伝説を伝えていますが、それからもわかるとおり、昔釧路湿原は海になっていて、遠矢は太平洋を眼下にのぞむ海岸になっていました。釧路湿原の北の一番奥深い岬にキラコタンという地名がのこっています。キラコタンは津波で逃げたコタンという意味ですから、これからは釧路湿原が海であったことがわかります。

「今日の一言」フンペ ヤン / 鯨が来たぞ
hunpe yan

「寄り鯨だぞ」という声がすると、コタン中大騒ぎになりました。老若男女を問わず、人々は一斉に浜へむかってかけ出しました。鯨の肉と脂は何ものにも代え難い貴重な食料でした。

リムセは1．祭事の準備として踊られる酒づくりのリムセ、2．奉納舞踊としての弓の舞（ク リムセ）剣の舞（エムシ リムセ）鶴の舞（サロルン リムセ）3．娯楽舞踊としての豊年踊り、棒の舞、色男の舞などの3種に分類できます。フンペ リムセは3．娯楽舞踊に入ります。

MEMO

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

今日のポイント
人間の生き方

今日の一言：
アイヌ ネノ アン アイヌ
aynu neno an aynu
人間 らしく ある 人間

シケヘ ソモ テイネレ クニネ アムケ イカワアミフ
sikehe somo teynere kunine amke ikawaamip
荷物を濡らさない ように 脱いだ 上着

コカラカリ ワ ヤサ クチヒ アリ シナシナ。
kokarkari wa yasa kuchihi ari sinasina.
で包ん で 裂いた 帯 で きつく縛った。

オラノ クイタクペ クス サム タ トフ クワ
orano kuytakpe kusu sam ta top kuwa
そして 目印 のため 側 に 竹の 杖を

アシ ワ キタイケヘ タ レタラ センカキ コテ ルウェ ネ。
asi wa kitaykehe ta retar senkaki kote ruwe ne.
立て て そのてっぺん に 白い 布を 結わえ てあった。

単語

シケヘ (sikehe) 「~の荷物」	テイネレ (teynere) 「濡れる」
アムケ (amke) 「脱ぐ」	イカワアミフ (ikawaamip) 「上着」
コカラカリ (kokarkari) 「~を~でぐるぐる巻く」	ヤサ (yasa) 「~を裂く」
クチヒ (kuchihi) 「~の帯」	シナ (sina) 「~をしぼる」
クイタクペ (kuytakpe) 「目印」	トフ (top) 「竹」
クワ (kuwa) 「杖」	アシ (asi) 「~を立てる」
キタイケヘ (kitaykehe) 「そのてっぺん」	レタラ (retar) 「白い」
センカキ (senkaki) 「布」	コテ (kote) 「~に~をゆわえる」

解説

吉良平治郎は1886(明治19)年2月3日、桂恋コタンで生まれました。母の名はマツツル(ミツ)、父の名はヌサシベ(縫治)と言いました。

1922(大正11)年1月16日昆布森局の臨時送込人に採用され、釧路局と昆布森局の間の郵便物の送込しました。3日目にして暴風雪に見舞われ、釧路と昆布森の中間地帯に当る宿徳内で殉職しました。

吉良平治郎の行為が高等小学校修身教科書(昭和5年発行)に、「責任」という題で載録されたのです。教科書の「責任」の中から

「人は誰でも我身に引受けて果さなければならない務がある。これらの務はどこまでもりっぱにし遂げ、又、した事の善し悪しについても、あくまで其の結果を自分に引受けなければならない。之を責任という。 - 中略

平治郎が釧路から約三里を距てた宇宿徳内に通ずる坂路にさしかゝつた頃には、暴風雪はいよいよ烈しくなり、行く手は見えず、荷物は重し、其の上襲つて来る飢と身を切るやうな寒さに耐へかねて、雪の中によるめき倒れた。しかし郵便物の大切であることを思ふと、又勇気を振るつて起上り、僅かに寒さを防いでゐたズツクの外套をぬいで、郵便物がぬれない様に行囊を包み、さうして帯を裂いて其の上をしつかりとくゝつた。更に唯一の力としてたづさへて来た竹の杖を傍に立て、先端に手拭を結んで目じるしとした。それから救助を求めようとして、坂下の人家のある方を指して、深い雪の中を歩き出した。しかしものゝ一町も進まない中に、吹雪は全く彼を埋めてしまつた。 - 後略

「今日の一言」アイヌ ネノ アン アイヌ/人間らしくある人間
aynu neno an aynu

アイヌ社会では、人間としての立派な生き方をするアイヌのことを、アイヌ ネノ アン アイヌとアイヌを二つ重ねて呼びました。アイヌという言葉は人間という意味で、誇らしいアイヌの言葉です。行いの悪いアイヌはウエンペ(wenpe)「悪い奴」と言って、アイヌとは言いませんでした。

MEMO

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....



今日のポイント

釧路昆布森沿岸の難読地名

今日の一言：

重 蘭 窮
cip ranke usi
チブ ランケ ウシ



- | | | |
|---------|---------|---------|
| 1. 又飯時 | 2. 来止臥 | 3. 浦雲泊 |
| 4. 跡永賀 | 5. 冬窓床 | 6. 初無敵 |
| 7. 入境学 | 8. 賤向夫 | 9. 分遣瀬 |
| 10. 老者舞 | 11. 知方学 | 12. 尻羽岬 |



松浦武四郎書「東西蝦夷山川地理取調図」から

解説

アイヌ語

ローマ字表記で解釈

- | | | |
|-----------------------------|---------------------|--------------------------------------|
| 1. マタイトキ | mata etok | 冬・水源（湧き水を汲む） |
| 2. キトウシ | kito usi | ギョウジャンニク・群生するところ |
| 3. ポントマリ | pon tomari | 小さい・泊地 |
| 4. アトエカ | atuy ka | 海の・上 |
| 5. プイマ | puy oma | 穴・ある（ローソク岩） |
| 6. ソンテキ | to un tek | 沼・である・ような（静かな海） |
| | so un tek | 水中のかくれ岩・多き・ところ |
| 7. ニコマナイ | ni ko oma nay | 寄木・に向って・はいる・沢 |
| 8. セキネツ | cep nurunke p kenep | 魚・下る・ところ（けわしい崖下） |
| | | 禿山で石落ちるところ |
| 9. ワカチャラセ | wakka carase | 水・チャラチャラと音をたてて流れているところ（滝） |
| <small>（地図上にはありません）</small> | | |
| 10. オシャマツ | o i suma pu | 川尻・ところ・岩・倉（老者舞川の川口に、倉の形をした大黒岩がどんとある） |
| 11. チボマナイ | cep oma nay | 魚・はいる・沢（川口） |
| 12. シリッパ | sir pa | 大地・頭（岬のこと） |

「今日の一言」チブ ランケ ウシ / 重蘭窮 (地図13)

cip ranke usi

チブランケウシ cip ranke usi 舟・いつも・おろすところ
難読地名を、カタカナ・ローマ字表記すると、きわめて易しい地名です。仙鳳趾にあり、舟を作っては、ここで進水しました。同義の地名に各地にチブ タ ナイ（船・をほる・いつもする = 木をくりぬいて丸木舟をつくる）があります。

MEMO

.....

.....

.....

.....

.....

アイデンティティー



今日のポイント

八重清次郎エカシとウチャシコマ

今日の一言：

ウチャシコマ
言い伝え



クスリ コタン エフ チセ アイ ウチャシコマ ニシパ ウタラ ノヌ ヤン
釧路 市 八重 宅 私の 昔からの語りごと だんなさんたち 聞いて下さい。

アイ オンベツ コタン シオク アンネワ アイ ミチ トット ニシパ アン
私は 音別 村で 生まれたのです。 私の 父 母は 和人 です。

エカチ レンクル レンヤンパッケ ユビ シサム トット レシカ アンペアン サボ
子ども 3人 くれていった。 兄は 和人の 母に もらわれて育った。 姉は

オンベツ コタン アイヌ ハボ レシカ アンペアン アイ シラヌカ コタン
音別 村で アイヌの 母に もらわれて育った。 私は 白糠 村に

アイヌ ハボ レシカ アンペアン コロ ハボ イカイ キワ トイタ カキ
アイヌの 母に もらわれて育った。 私の 母 おぶって 畑を 耕した

チョウ ケフ プレブ ボクサ イエレ キナ エベ
米・芋・油・筋子入ったもの オオウバユリ ギョウジャニンニク それを食べさせてくれた。

ボン エカチ サツテキボネ ハボ アペ フチ カムイ イーオイラサクノ アンコロ コルシ
子どもころ 弱かった 母が 火の 神様に 忘れないで 我が 子を

セレマカ ウシ アン ハボ オン カムイ ハボ チシ カンネ アン コロ コルシ ホクレン
見守って 下さい 母が 祈り 母 泣き ながら 我が 子よ 早く

ボロ アリアンペ コロ ハボ イェカネ アエ オレス アロ
大きく なれと 私の 母は 言いながら 私を 育てて くれた。

アー トゥベサン シラヌカ コタン アイヌ カンベ アシカイ オマン シサム オクカイ
私 8歳のとき 白糠 村 アイヌの 学校 に 行く 和人の 男の

エカチ ワンベクル エヨコ フアン アイ ク アイヌ エカチ コイキ ネワ
子ども 10人 待ち伏せしている 私 を アイヌの子ども 叩かれ または

メノエ レラ ペッイヨ テケ チキリ コンロ アイ チシカンネ チセ エク ハボ ルシカ
寒風のと看 川の中に 手 足 しばれて 私 泣きながら 家に 帰る。 母 怒って

ニシパ チセ ヘカチ ミチ トット ヘカチ アンコロ シネプス トクシテ ハウエ
和人の 家に行き 父 母 子どもに 我が子どもを どうして 皆で 泣かせて

エネ アニ ハボ チャランケ ウェン チセ ルシカ アン クンネワ チャロ ウェン
いるのか 母が 怒って から 帰ってきた。 この苦しみを忘れる事できない

ネチ オロ アマン チセ オマン ハボ アマン イッケ チセ コロ ニシパ アマン オワサン
それから 米屋に 入る 米わけてください 家の 旦那 米 がない

アイヌ メノコ ヘタク ホシビ ハボ チシ アンカネ アン テケ アニネ チセ オマン
アイヌの 女 早く 帰れ 母 泣きながら 私の 手を ひいて 家に 帰る

ニシパ チャロ ウェン アイ ワンベ ハボ タンダ エク
旦那のしゃべった事忘れられない。 私が 12歳のとき 母が ここに来なさい

オクカイ イシカ クルネアン トランネ ワ モニキ アン ハボ チャロ ウェン
お前 人の物とるな 大人になったら まじめ に 仕事しなさい 母が 話してから

ライ アンクス ケライボ オクカイ ネアン アチャ ハボ ヤイライケレ
亡くなった 私 おかげで 大人になり 父 母 ありがとう。

クー コロ ボツネ クスリ コタン ボンネレ エフ チセ エク ネアン ボロ チーフ オウ
私 は 24歳 釧路 市 養子に 八重の家に 来た そして 舟に 乗り

カムイ チェブ サンケ ポコ サンケ アイ マチ クスリ コタン アイヌ アチャ ハボ
 魚 とり こんぶ とり 私の妻 釧路市 アイヌの父母

レシカ アンペアン マチ エカチ レン アンネ シクオ アンネワ マチ ワンペ シネホッ
 もらわれて育った。 子ども 3人 生まれ 生まれてから 妻 35歳

ライ ポンエカチ ミチ アマン オワサン エカチ ハウケノ ミチ ニサッタ アマン
 亡くなった。 子どもたち 父 米がない 子どもがしゃべる 父が明日 米

ホッフ アン ポン エカチ ウタラ エヤイコブンテク。 ネアンボロ アカン コタン
 もってくる。 小さい子どもたち 喜んでくれ、よく育った。 そして 阿寒 村から

マチクル クスリ コタン エブ チセ エク エカチ イネフクル ヤイラム ポロ ヘカチ
 妻 釧路市 八重の家に来た 子ども 4人 おかげで 大きな子ども

アンネ マチ ヤイライケレ クスリ シサム タンベ ネブス アイヌ プリワ ネットクシ
 になった。妻よ ありがとう。 釧路の 和人 おまえ どうして アイヌのこと なんでも

テイタ オロシベ クーコロ ヘカチ タラ アイヌ アチャ ハボ レシカ アンペ クス
 知っているんだ。 私は 小さいときから アイヌ 父母 育てられた。 そこで

イナウケ カムイノミ アイヌプリ シク クウン。
 イナウこしらえて 神様にお祈り アイヌのことしたのです。

モシリ コタン クル ニシバ エカチ ウワッテ レシカ ポロ ヤン オッカイ メノコ
 国の 村の 人 和人の子ども おおぜい育てて 大きくした。 男 女

モシリ アイヌ エカシ フチ ヤイライケレ モシリ コタン コロ アイヌウタラ ウタラ
 国の アイヌ 祖父 祖母 ありがとう。 国の 神様 アイヌの人たち 人びと

オピッタ エブンキネワ ウンコレヤン オロバク
 全部を お守り下さるよう お願い申し上げます。 終わり

「今日の一言」ウチャシコマ / 言い伝え

ucaskoma

地域によって、ウパシコマ、ウチャシコマ、ウチャシコマと言いますが、一言で言うと、言い伝えという意味です。八重清次郎さんのウチャシコマは自分の体験を語るお話ですが、伝説、昔話などがこれに入ります。ウチャシコマと似たお話しに、トウイタク(tuitak)ウウェペケレ(uwepeker)がありますが、これを民話(昔話)といいます。楽しい娯楽のための昔話です。

MEMO

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....